INVITATION

Ehime University Hospital ［愛媛大学医学部附属病院広報誌］

VOL 3

2006 NEW YEAR

患者様から学び、患者様に還元する病院

愛媛大学医学部附属病院

地域と連携した機能分担で、命題である三次救急の治療に邁進

救急部 副部長 相引眞幸 医師

PROFILE

あいびきまゆき◎愛媛大学医学部・救急医学助教授、附属病院救急部副部長。1954年、愛媛県生まれ。1978年金沢医科大学医学部卒業、医学博士。救急医療、集中治療を専門に活躍する。学生時代はゴルフ部に所属するも、現在は多忙なため全くプレーできていない。

24時間365日、「三次救急」の治療が愛媛大学病院救急部の大きな役割。三次救急とは、重度の外傷や熱傷、急性中毒、窒息、溺水などの事故による疾患、急性呼吸不全、急性循環不全、意識障害、敗血症、急性肝不全、急性腎不全、種々の出血など、一つの診療科では対応できない重症の救急疾患を言います。すぐ治療を始めないと生命が危険になったり、重大な障害が残ったりする、比較的むつかしい病気や事故ですね。その大部分は救急車で運ばれるか、他の医療機関からのご紹介で来院されます。三次救急を担当する救急医は、外科、内科、整形外科など多様な診療科の知識を駆使して患者様を治療するのが役割です。そのためにもチームワークが大切。様々な分野の優秀な人材が集まり、チームで治療にあたります。私自身は麻酔科の出身で集中治療を行っていました。他の医師も一般外科や整形外科などのスペシャリストですし、スタッフ全員が救急の指導医の資格を持っています。当病院は四国で唯一、救急専門医及び指導医の認定施設でもあるんですよ。

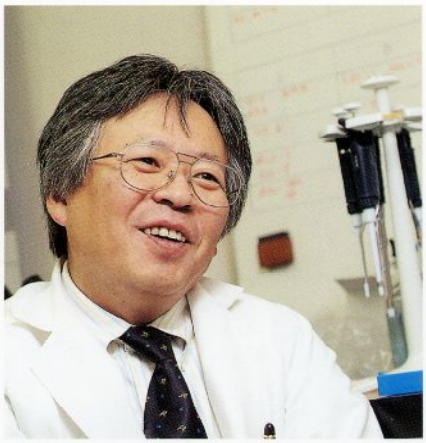
高度な救急医療活動のための設備も整えています。一酸化炭素中毒患者などの治療に有効な高圧酸素治療室があり、様々な病態に適応されています。また、愛媛県は島嶼部や山間部の地域が多いので、各市町村の近隣に三次救急の受付施設が必ずあるとは限りません。そこでドクターヘリの搬送も行われています。ドクターヘリなら県の消防防災ヘリに救急部の医師が同乗して現場まで向かいますので、現場での応急処置ができ、搬送も車よりかなり時間短縮できるので、救命に繋げることができています。

私の専門分野では、頭部外傷の治療に低体温療法を用いて成果を上げていますね。これまでに前任地を含め200例以上の患者様に同療法を施行し、脳外科の先生が諦めた患者様が、意識を取り戻した例もあり、私は有効だと考えています。

三次救急の他にも、診療所や他の病院からの紹介があった場合は、必ず診療を行っています。当救急部は200%を超える稼働率、外傷だけではなく様々な疾患を診ていますし、症例数も多いですね。そこでご理解いただきたいのは、三次救急受け入れのため、軽度の患者様に手が回らない状況。中予地域の市町はすべて、二次救急受け入れの当番医院になる二次輪番制度に加わっていますので、このような制度を利用していただければ幸いです。機能分担をすることで、周囲との連携を大切にした地域医療に貢献していきたいと思っています。

全国トップレベルの皮膚再生医療で、大学病院ならではの治療を

皮膚科 **白方裕司** 医師



PROFILE
しらかたゆうじ◎愛媛大学医学部・皮膚科学特任講師。1987年愛媛大学医学部卒業、医学博士。培養皮膚、表皮角化細胞の増殖と分化、遺伝子治療、再生医療などを専門に活躍する。趣味は磯釣り、一昨年60cmの石鯛を釣り上げた。

私は皮膚科学の中でも先天性表皮水疱症の治療を専門とし、培養皮膚を使った治療を行っています。先天性表皮水疱症は遺伝性の難病で、ちょっとした肌への刺激で表皮に繰り返し水ぶくれができる疾患です。これまで水疱症に対する効果的な治療法はなかったのですが、現在は培養皮膚移植が一番効果的とされています。培養皮膚を使った治療は、通常の皮膚移植をしても治りにくい患者様に対して、わずかな皮膚組織で大きい患部が治療でき、繰り返し移植できる低侵襲の治療です。愛媛大学の皮膚培養技術は世界でもトップレベルです。切手大の小さな皮膚片から、体全体を覆うほどの皮膚が培養でき、細胞の長期保存も可能で一度の皮膚採取で繰り返し移植ができます。当皮膚科には青森から治療に来られている患者様もいらっしゃいますが、遠隔地の患者様には培養皮膚を冷凍して送ることも可能です。実際に東北大、京都大、旭川医科大などへは当病院で培養した皮膚を送っています。東海村の臨界事故では東京大から、美浜の原発事故の際は富山大から、当病院に皮膚培養の依頼がありました。

愛媛大学の再生医療は全国でも高いレベルを誇っています。しかし、水疱症を完治させるには遺伝子レベルの治療しかありません。これまでの研究を生かし、培養皮膚と遺伝子治療を組み合わせた、より良い治療法を研究中です。大学病院は一般の病院では治療できないような患者様に対して、治療法を考えたり、見つけたりすることが求められていますし、私も大学病院に勤める医師として、難病を抱えた患者様を助けることが使命だと考えています。

コミュニケーションを大切に、患者様にとって最良の治療を目指す

眼科 **原 祐子** 医師

PROFILE
はらゆうこ◎愛媛大学医学部附属病院・眼科助手。1995年愛媛大学医学部卒業。角膜上皮における感染免疫機構、および角膜上皮創傷治癒、屈折矯正手術などを専門に活躍。学生時代はスキー部に所属。ストレス解消法は、友だちとおいしいものを食べて騒ぐこと。

私の専門は角膜移植、白内障手術、屈折矯正手術です。角膜移植の症例は当病院で年間50例以上。大橋、宇野、白石、山口、そして私の5人が角膜移植グループとして、治療にあたっています。以前はどのような疾患に対しても角膜全体を使う全層角膜移植を行うことが一般的でしたが、最近は培養角膜上皮移植や深層角膜内皮移植など、角膜の層を分けて行う新しい移植手術ができるようになりました。当眼科では全国でもかなり早い時期から先端の手術技法を取り入れ、術後の経過を含めて良好な実績を残しています。特に自らの細胞から培養した角膜を移植する、培養角膜上皮移植ができる施設は全国でも数カ所。当病院には四国はもちろん、中国、九州地方の病院の紹介で来られる患者様もいらっしゃいます。この手術によって、これまで諦めなければならなかった疾患が治療できるようになりました。この10年ほどで、角膜移植は劇的に躍進していますが、当病院の角膜移植における成績は、全国的に誇れると自負しています。

角膜移植は術後の拒絶反応や感染症の予防のため投薬を続ける場合もあり、様々なリスクを伴います。誰にでも移植を進めるのではなく、患者様にとって本当に必要な治療法を見極め、生活にあった視力の回復を行うために、私たちが最も大切にしているのはコミュニケーションです。患者様ご本人はもちろん、ご家族の方ともよく話し合い、視機能を良くするだけでなく、生活の質を向上させるために、ベストの治療方針をたてます。患者様が愛媛にいながら最高の治療を受けられるように、私自身も常にアップデートしていきたいですね。

愛媛大学医学部附属病院 センター・施設のご紹介

お気軽にご相談ください

患者様のご相談・ご紹介等を承っております。ぜひ、ご利用ください。

周産母子センター

周産母子センターでは、合併症をもつハイリスク妊婦の妊娠・出産や、低出生体重児や病気をもった赤ちゃんの診療を担当しています。胎児期から新生児期への連続した周産期と呼ばれるとても大切な時期を、小児科・産婦人科の両診療科のスタッフが、一貫して診療することによって周産期医療の成績向上をめざして努力しております。産科部門では、出生前診断・治療、不妊治療・体外受精、妊娠中毒症、切迫早産、多胎妊娠などのハイリスク妊娠に対する高度な集中管理が行われ、重症の新生児を診療する新生児集中治療室（NICU）では、24時間体制で新生児の集中治療が行われており、高頻度振動換気（HFO）や一酸化窒素（NO）吸入療法などにより、赤ちゃんの救命率および長期予後が著しく改善されています。妊娠・出産・育児・発達・療育などご不安なことがありましたら、当センターのスタッフにいつでもご相談ください。

周産母子センター
センター長:貴田嘉一、副センター長:松原圭一

産科　TEL:089-960-5760　FAX:089-960-5381
NICU　TEL:089-960-5771　FAX:089-964-9131

創薬・育薬センター

当センターは、愛媛大学医学部附属病院と関連のある医療機関との連携を強化した「ネットワーク治験」を行っています。平成17年10月からは訪問CRC（治験コーディネーター）による「ネットワーク治験」の支援も開始しました。本ネットワークは、治験の質が高く、エントリーが円滑に進むスピードある実施体制となっています。

創薬・育薬センター
センター長:野元正弘
副センター長:荒木博陽、森豊隆志
TEL:089-960-5914
FAX:089-960-5910
E-mail：souyaku-post@m.ehime-u.ac.jp

医療福祉支援センター

当センターは、患者様が安心して療養できるよう支援するために、診察時や退院時のご相談・ご紹介等を承っておりますので、お気軽にご相談ください。

また、ご紹介くださる初診患者様のFAXによる診察予約も承っておりますので、詳しくは下記までお問い合わせください。

医療福祉支援センター
センター長:三木哲郎
副センター長:恩地森一、石原 謙、櫃本真聿（専任）
TEL:089-960-5322/5261
FAX:089-960-5959
E-mail:sien@m.ehime-u.ac.jp

平成18年2月より抗加齢センターがオープンします。

抗加齢センターは、壮年者・高齢者が健康長寿を過ごせることを目的として設立されます。特に血管系の特殊検診により血管年齢を測定することおよび各種脳機能検査により認知症の予備軍を早期発見することで個人のデータに基づいた医療（オーダーメイド医療）を実践する予定です。

通常外来で行っている保険診療とは区別され、自由診療による「抗加齢ドック」を行います。年齢制限はありませんが、一般には壮年者・高齢者（具体的には40歳から70歳）を対象と考えています。

主な検査項目として、頭部MRI・MRA、頸動脈エコー検査、脈波伝播速度、認知機能検査、骨密度検査、重心動揺検査などがあります。これらの結果を総合的に分析してお客様の血管年齢を算出するとともに今後の生活について適切なアドバイスをいたします。

TEL:089-960-5932
FAX:089-960-5916
（ただし2/1からです）
http://www.m.ehime-u.ac.jp/hsp/aagc

編集後記

明けましておめでとうございます。愛媛大学附属病院広報誌INVITATION第3号は新春号にふさわしく暖かなムードの表紙で、小児科の女性医師に登場してもらいました。小児科医の極端な不足の中でも、にこやかな笑みを絶やさず激務をこなす姿に拍手です。大学の小児科医達は松山圏の小児救急体制にも参加して、専門医療だけでなく地域医療にも貢献しています。愛大附属病院は地域に生き地域とともに歩む大学病院です。本年もよろしくお願いいたします。

◎愛媛大学医学部附属病院広報委員会
委員長　檜垣實男

◎表紙の人
周産母子センター　徳田桐子講師
— 小児科病棟デイルームで子どもたちと —

愛媛大学医学部附属病院
〒791-0295 愛媛県東温市志津川　Tel.089-964-5111（代）
ホームページ http://www.hsp.ehime-u.ac.jp/